

令和4・5年度 神奈川県立学校 第三者評価実施報告書			
評価実施校	城郷高等学校	課題解決に向けた取組状況への評価・助言 ＜評価委員＞	課題解決に向けた取組の成果と課題 ＜実施校＞
カテゴリー名	インクルーシブ教育実践推進校		
課題 1	すべての生徒が共に学ぶことが出来る授業の実践について	<p>これまでの当校の実践に加え、「インクルーシブ教育推進校」としての取組（連携生徒の受け入れ）から、連携生徒を含めた生徒たちの実態に応じた教育課程の構築やチーム・ティーチング(TT)の効果的な活用法などを試行錯誤しながら取り組んできた成果が、徐々に現れつつあると考えられる。</p> <p>指標1及び指標3の「TTの活用」に関しては、生徒からのアンケートにも示されているように、生徒たちからの評価もおおむね高く、教科による相違などの課題も散見されるが、今後の高等学校におけるインクルーシブ教育を推進していくための効果的な一つの手立てとして、モデル的な取組になると考えられる。更に実践を重ねて、他校や他地域に対しても、その良さや成果などを発信していった欲しい。</p> <p>指標2の「個別教育計画の作成」に関しては、過去の文面をデータベース化するなどして、作成担当教員の負担を軽減させる取組が進められている。こうしたデータベースを上手く活用しながら、引き続き、的確な生徒理解を深めていった欲しい。</p> <p>2年目に校長や多くの教員の異動があったが、インクルーシブ教育実践推進校として、「全ての生徒が共に学ぶことができる授業の実践」に向けて、1年目に実行してきたこと、課題として挙げられたことが引き継がれ、着実に成果を出すことができている。また、校長始め多くの教員が代わることで1年目の成果に加え、新たな視点が組み込まれ、他校の良い実践例を取り入れようとする工夫も見られ、よりレベルアップしていると感じられる。校長のリーダーシップの下、全教職員が課題を認識し、目標達成に向けた指標を理解して行動したことが要因であり高く評価できる。</p> <p>新たな取り組みとしてTTをスタートさせ、その対応に意欲的に取り組むことができている。課題も多く出ていたが、その一つ一つをクリアすべく、様々な工夫により改善を進めてきたことは高く評価できる。今後は、ここまで取り組んできた内容をマニュアル化して全ての先生に周知徹底するとともに、新たな教員が配属されても後退することなくレベルアップを図っていただきたい。</p> <p>1人1台の端末活用が今回の課題解決にどれだけ寄与していくのかという点も大切であり、ICT推進が個別最適な学び方につながるモデルケースを構築してほしい。ICTに慣れている20代～30代の教員が中心となり、より良いPCの活用法について教員間の研修や授業見学などを通して行うことで先生方の意識を高めていくことが肝要である。</p> <p>当初課題として出ている連携生徒に対する個別教育計画作成については、負担感軽減に向けた工夫がみられ評価できる。今後は過去のデータを蓄積、新たな個別教育計画作成にICTをどのように活用できるのか、新たなモデルケース構築を目指していただきたい。</p>	<p>＜成果＞</p> <p>インクルーシブ教育推進校として、城郷高校が実行してきたことを教員が異動しても引き継げる校内システムを定着させることができた。</p> <p>一人の教員が教室の前で授業を行うスタイルでは質問しにくい・できない生徒も複数の教員が教室にいることで質問がしやすくなったと答える割合が増えてきた。</p> <p>TTによる授業のモデル的な取組を校内研修として全教員で共有していくことが定着してきた。また、PC端末を効果的に活用するなど、教員個々が持つ力を存分に発揮する場面が増えてきた。</p> <p>「個別教育計画の作成」に関して、生徒一人ひとりのフォルダにデータを作成していたため、時間がかかり効率も悪く、全体の様子もわかりにくいという欠点があった。毎年データを蓄積することにより、現在では「個別教育計画の作成」をするときには、その情報を共有できるようデータベース化している。この方式を採用したことにより、効率的に作業が進められ時短効果が得られた。また、初めて作成する教員も、データベースに蓄積された情報を参考にすることでスムーズに作業できるようになった。</p> <p>生徒たちが苦手意識をもっている1学年の理科（物理基礎）や2・3学年の英語などでは、TTによる授業の効果が高いことが、生徒の授業アンケートから見ることでできた。今後も全教科でTTの有効性を考え、取組が進められるよう工夫していきたい。</p> <p>生徒一人ひとりに応じた対応や指導の分担が可能になったことで、授業の流れから逸脱しがちな生徒にもスムーズに対応できている。授業全体として、複数の視点で幅広く生徒たちに対応することができるようになった。また、お互いの発想や指導方法を、授業前の打合せで共有することから、良好な刺激を受けたり、見落とししていた部分を確認することができるなど、相乗効果が生まれた。</p> <p>1人1台端末を板書やワークシートと併用して、要所で効果的に活用することを目標に授業改善に取り組み、生徒の主体的・対話的な学びにつなげることができた。</p>
	R5 指標	<p>1. 生徒の実態を考慮しながら授業ができたかについて、質問8を「複数の先生が教室にいます、質問しやすい、分からないことが気軽に聞ける」と「1人1台端末を活用することで、質問しやすい、分からないことが気軽に聞ける」に分割することで新たに評価する。</p> <p>2. 連携生徒に対する個別教育計画を質的に向上させるために、過去のデータ（データベース）を活用し目標と手立ての見直しや更新を定期的実施できたか、活用率を振り返りアンケートで評価する。</p> <p>3. 各教科の特性に応じた授業の実践例から共通化できるTTの在り方・手立てを抽出し、バージョンアップを図り他教科で活用できたか、TTの効果を各教科で検証・点検を行う。</p>	<p>＜課題＞</p> <p>今後は、TTによる授業のモデルケースを継続しつつ、T1・T2の役割を単元で入れ替えるなど、校内での改善を検討していく。</p> <p>特別募集生徒への対応のみならず、様々な課題を抱える生徒への対応についても、検討を進める必要がある。</p> <p>すべての教員が研修や授業見学等を通して自己研鑽に取り組み、学校全体のレベルアップにつなげていく必要がある。</p> <p>「個別教育計画の作成」のデータベースについては、すべての教員が閲覧できる環境なので、セキュリティ対策を立て、事故防止にも取り組む。また、個別教育計画を作成する際には、引用しやすい言葉を使用したり、保護者の印象も考慮して表現を工夫することも必要である。</p> <p>毎年3月に全教職員対象のアンケートを実施し、現在の個別教育計画のデータの改善・更新を行っている。</p> <p>TTのペアによっては、多忙や非常勤講師の勤務時間などによって打合せの時間が取れず、意思の疎通や連携・協力が難しい状況もあった。</p>
		<p>総括評価(これまでの訪問①～⑤を踏まえた課題解決の取組状況に係る評価) ＜評価委員＞</p>	<p>総括評価を踏まえた次年度の学校運営に係る改善点および改善方法 ＜実施校＞</p>
		<p>当校で取り組んでいる連携生徒に対する教育内容や指導の手立ての検討は、通常のクラスに在籍する多様なニーズのある生徒への対応に活かせる内容でもありと考えられる。これまでの当校での取組（TTの活用、学びのユニバーサルデザイン化の推進、校内環境の整備など）を普及させていくことは、神奈川県内の全ての高等学校における「インクルーシブ教育の普及・推進」に寄与していくものと考えられる。これまでの取組を是非、継承していった欲しい。</p> <p>高校側は、評価委員の評価や助言を真摯に受け止めており、次の訪問では、評価・助言に対する適切な説明が得られている。インクルーシブ教育実践推進校として、全ての生徒が共に学ぶことができる授業の実践は簡単に構築できるものではなく、常に新たな課題が出てくると考えられる。その上で、多様な生徒が同じ空間で学ぶことの意義を十分に活かした環境作りを目指してほしい。一般生徒、そして教員も含め、人を思いやる気持ち、優しさが更に育まれれば、インクルーシブ教育実践推進校としての取組は一つの大きな成果として評価されるものと考えられる。</p>	<p>理念を共有するために、推進グループがインクルーシブ研修会を企画・実施し、「インクルーシブ教育の普及・推進」「生徒が共に学ぶことができる授業」を教職員に浸透させる取組を行う。</p> <p>インクルーシブ教育の実践を継続しながら、他校等の情報や取組も参考にして、当校の教育目標を推進していく取組を工夫する。</p> <p>異動に伴う業務の引継ぎや次代の推進担当者・進路担当者の適材の発掘、人材育成のシステムを検討し、持続可能なインクルーシブ教育実践校をめざす。</p> <p>「特別募集により入学した生徒」への支援と、「一般募集で支援を要する生徒」への支援をどのように分担し対応していくか検討していく。</p>